

2026年度 東洋大学 IRニュースレター Vol.1 (通算第20号)

2025年度「全国学生調査」結果 —2024年度の結果および全国平均との比較—



東洋大学
学長・IR室長 矢口悦子

今回、皆様にお届けするニュースレターでは、2019年度から4回の試行実施を経て、2025年度に本格実施となった「全国学生調査」(文部科学省)の集計結果にもとづき、本学の特徴についていくつかご紹介いたします。

IR室における取りまとめの結果、授業における教員からのフィードバック等によるコミュニケーションや授業運営補助者の活用が前年をやや上回っていることが確認されました。また、インターンシップや海外留学等の体験等を通じて、より多くの学生が課外活動等に参加し、その意義を見出すことができた、ということもわかりました。

加えて、授業そのものにおいては、学生からのフィードバック(授業評価アンケート)により、授業改善がなされた結果、自身の成長に繋がったという学生による評価が数値として確認されました。

しかしながら、学生同士の議論をはじめとした、建設的な意見交換による課題解決のための機会設定には、やや改善が必要であることが明らかとなりました。

これらの分析結果を踏まえ、本学では引き続き、学内での課題共有と議論を通じて着実に教育の質向上に努めてまいります。

文部科学省は、学生の学びの実態を把握し、大学教育の改善を図ることを目的として、2019年度に「全国学生調査」の試行を実施した。これまでに4回の試行調査を経て、2025年度より本格的な調査を開始した。今後の文部科学省では調査結果について、各質問項目において肯定的な回答割合が高かった大学の学部(学科)を上位順に一覧化した「ポジティブリスト」を作成するとともに、同意を得た大学の全体集計結果を公表する。また参加各大学では、自大学の調査結果を積極的に発信するとともに、全国共通の質問項目を用いることで、学生の視点から大学教育や学びの実態を他大学と比較・分析し、これらの結果は、IR、FD、SD、および自己点検・評価活動に活用される。加えて、他大学との情報共有を通じて、各参加大学が学生の意見を適切に反映した教育改善を促進することが期待されている。

2025年度の「全国学生調査」において、本学の調査対象者数は15,837人であり、回答者数は1,823人であった。回答率は11.5%である。2024年度の調査では、調査対象者数は15,571人、回答者数は870人であり、回答率は5.6%であった。以下に、2025年度の調査結果について、2024年度の本学と全国の結果とを比較し、本学の変化および特徴を分析する。

問1 大学に入ってから受けた授業で、次の項目はどのくらいありましたか。

図1 大学で受けた授業の状況

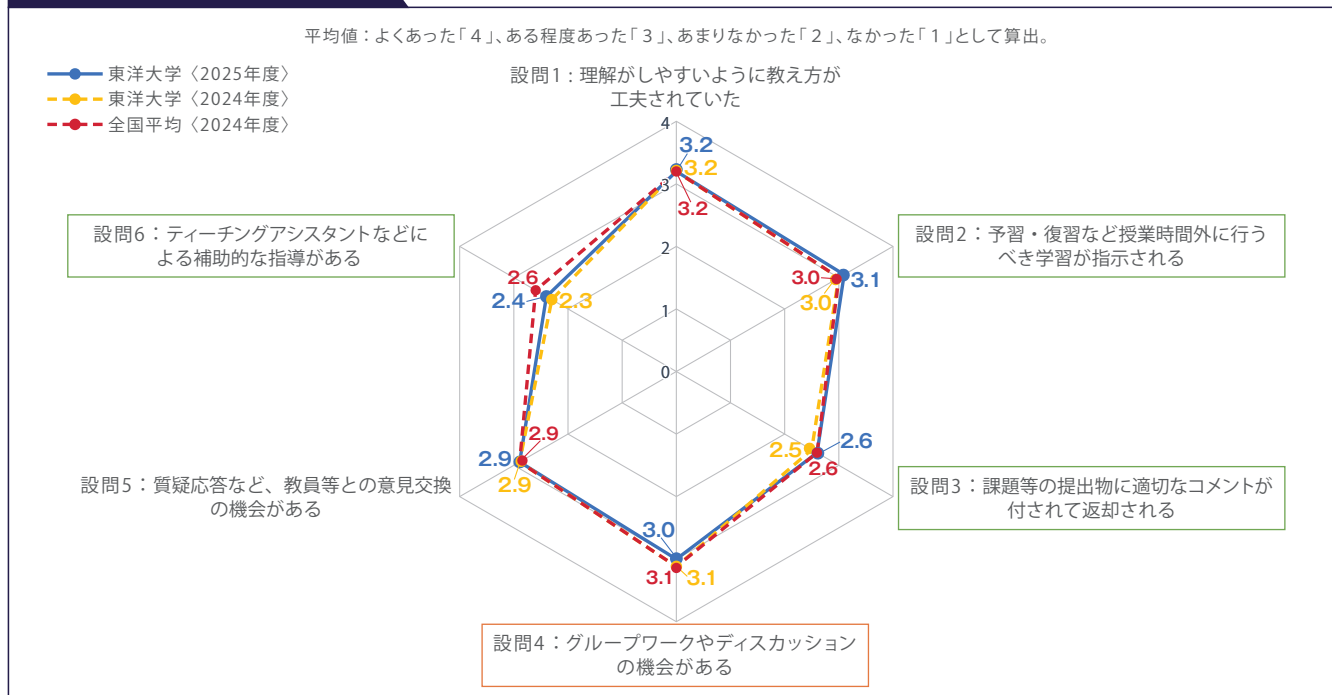


図1に示すように、「設問2：予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される」「設問3：課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」「設問6：ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」における平均値は、それぞれ2024年度と比較して上昇している（3.0→3.1、2.5→2.6、2.3→2.4）。一方、「設問4：グループワークやディスカッションの機会がある」に関しては、平均値が2024年度より低下している（3.1→3.0）。また、「設問6：ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導」については、2024年度の平均値より高くなっているものの、全国平均値の2.6には依然として及ばなかった。さらに、本結果には学部間の差異も認められる（詳細なデータは省略）。

問2 大学在学中に経験した以下の項目はどの程度有用だったと感じますか。経験していない場合は⑤を選択してください。

図2 大学在学中の経験及び評価

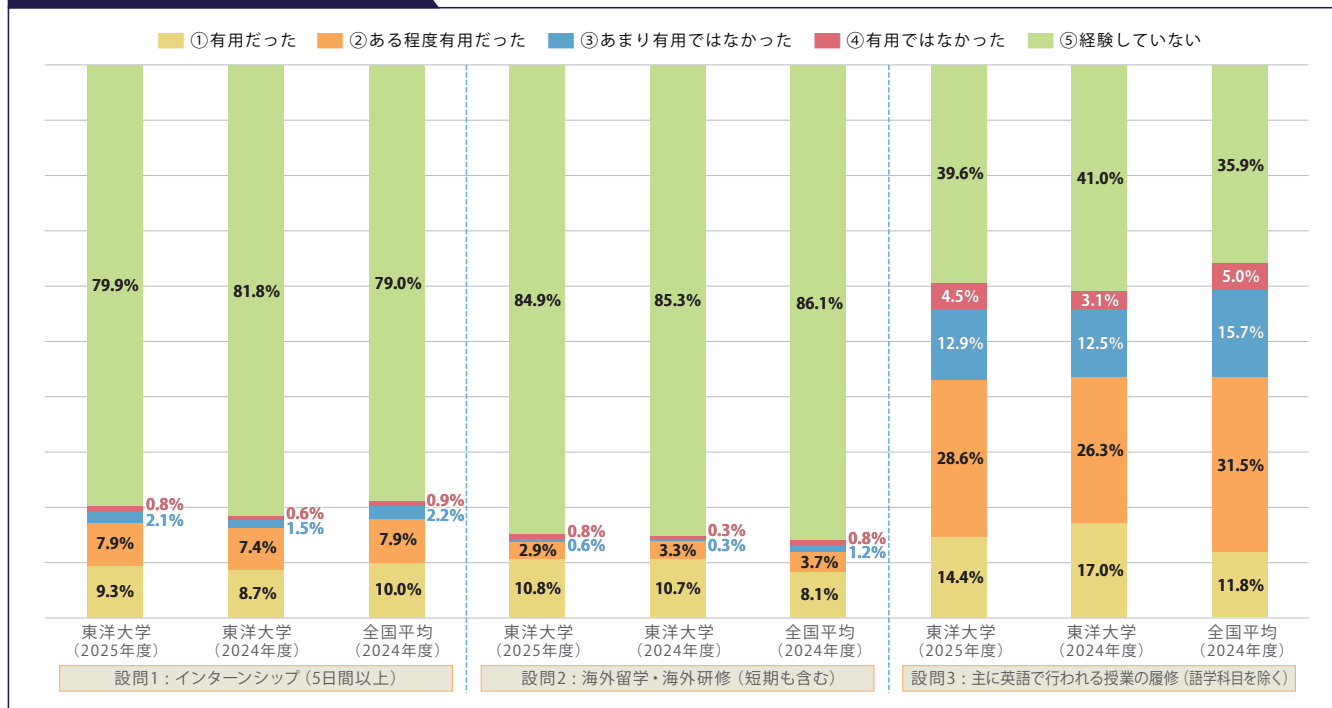
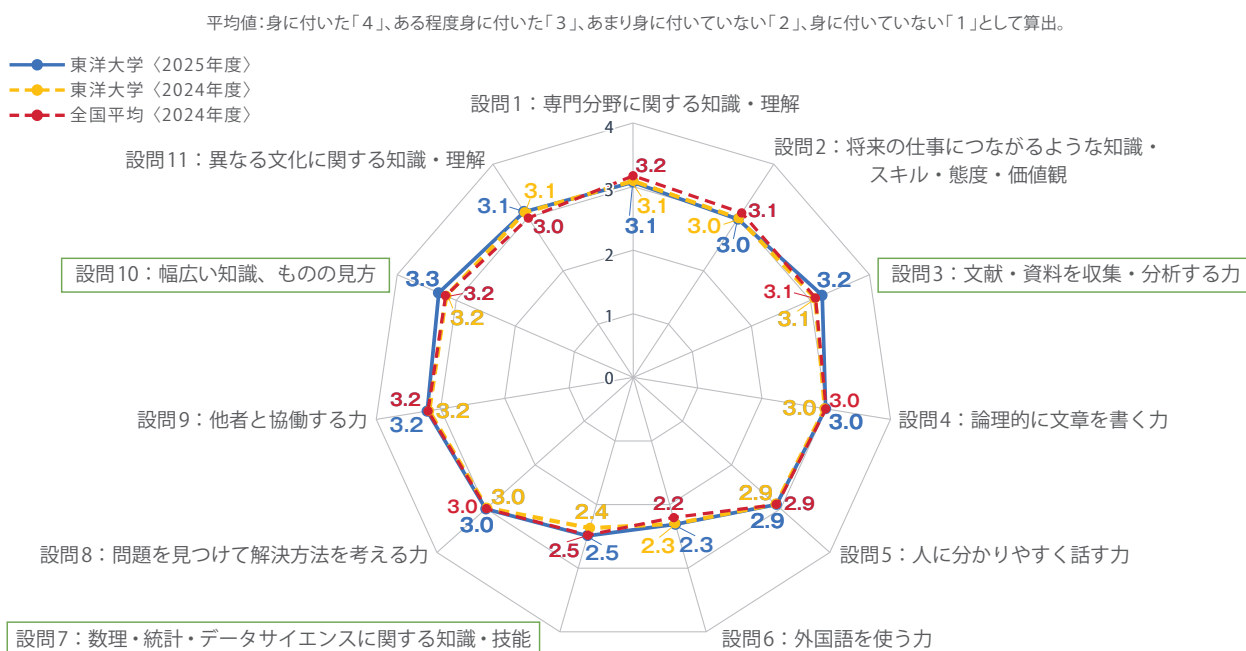


図2に示すように、「設問1：インターンシップ（5日間以上）」「設問2：海外留学・海外研修（短期も含む）」「設問3：主に英語で行われる授業の履修（語学科目を除く）」において、「経験していない」割合は、それぞれ81.8%、85.3%、41.0%から79.9%、84.9%、39.6%へと減少傾向を示している。これらの経験に関する肯定的な回答（「有用だった」「ある程度有用だった」）の割合は、「設問1」においては2024年度より増加している一方、「設問2」と「設問3」では横ばいの状況である。

さらに、全国の2024年度の平均と比較した場合、「有用だった」「ある程度有用だった」と肯定的に回答した割合は、「設問1」ではほぼ同水準で推移し、「設問2」および「設問3」では高い傾向が見られる。

問3 大学教育を通じて、次のような知識や能力が身に付いたと思いますか。

図3 大学教育を通じて身に付いた知識・能力



大学教育を通じて獲得した知識・能力に関する評価(図3)において、「設問3：文献・資料を収集・分析する力」「設問7：数理・統計・データサイエンスに関する知識・技能」「設問10：幅広い知識、ものの見方」の平均値は、それぞれ2024年度の値から3.1→3.2、2.4→2.5、3.2→3.3へと向上した。他の質問項目においても平均値は2024年度と変わらなかったが、全国平均を上回った項目は「設問6：外国語を使う力」および「設問11：異なる文化に関する知識・理解」であった。一方、2024年度の全国平均値を下回ったのは「設問1：専門分野に関する知識・理解」であった。

問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか。

図4 大学での学び全体を振り返って思うこと

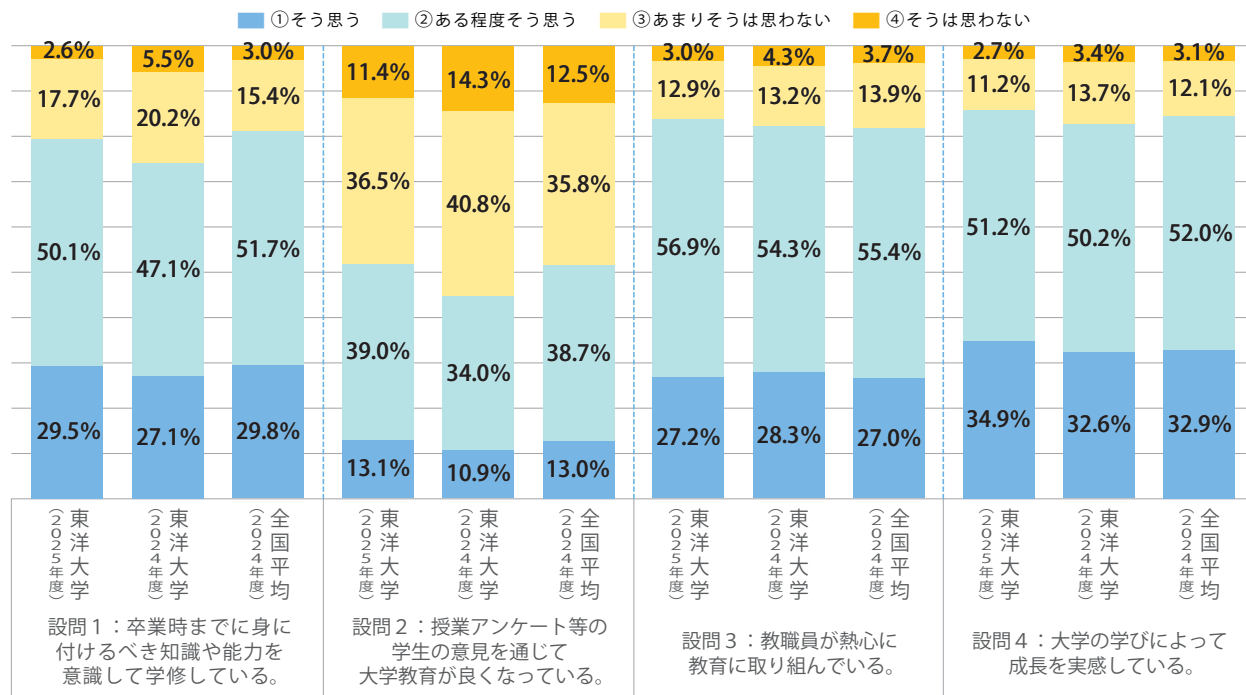
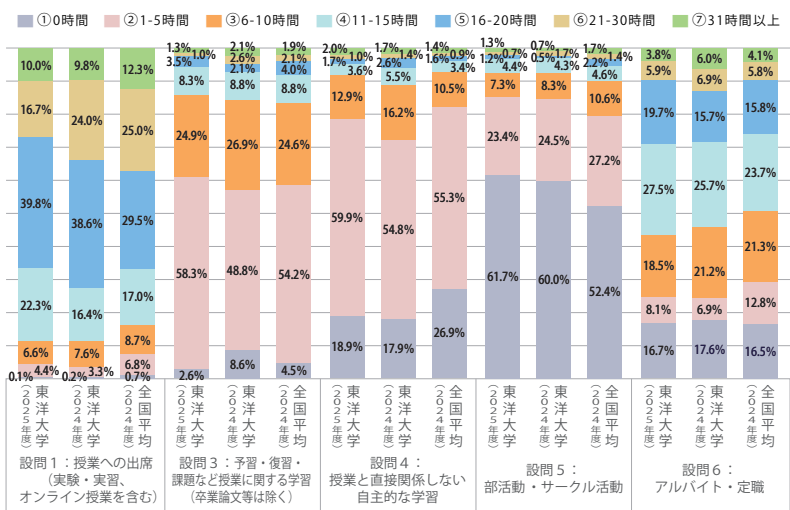


図4に示すように、以下の各設問において肯定的回答(「そう思う」および「ある程度そう思う」)の割合は、2024年度より増加している。具体的には、「設問1：卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している」では74.2%から79.6%へ、「設問2：授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」では44.9%から52.1%へ、「設問3：教職員が熱心に教育に取り組んでいる」では82.6%から84.1%へ、そして「設問4：大学の学びによって成長を実感している」では82.8%から86.1%へと、それぞれ上昇している。さらに、「設問1」を除く三つの項目においては、肯定的回答の割合は全国平均を上回っている。

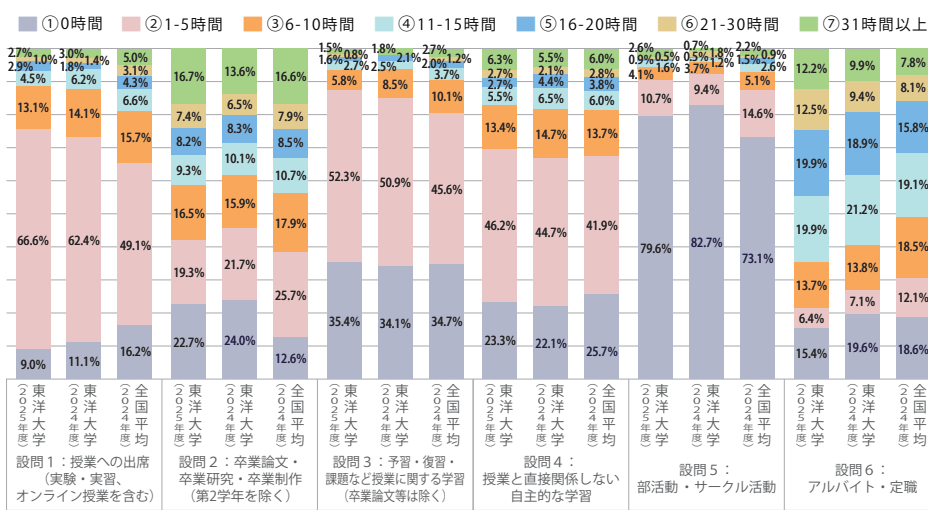
問 5 今年度後期の授業期間中の平均的な 1 週間（7 日間）の生活時間は、それぞれどのくらいですか。

図5.1 授業期間中の平均的な 1 週間（7 日間）の生活時間【2 年生（設問 2 を除く）】



まず、2年生の回答を図5.1に示す。「設問1: 授業への出席」については、〈16時間以上〉の割合が66.5%であり、2024年度の72.4%から減少している。2024年度の全国平均と同じ値である。「設問3: 予習・復習・課題など授業に関する学習」では、〈5時間以下〉の割合が60.9%であり、2024年度の57.4%から微増している。「設問4: 授業と直接関係しない自主的な学習」については、〈5時間以下〉の割合が78.8%であり、2024年度の72.7%より増加しているが、2024年度の全国平均である82.2%よりは低い。「設問5: 部活動・サークル活動」では、〈0時間〉の割合が61.7%で、2024年度の60.0%から微増している。全国平均の52.4%より高い値である。「設問6: アルバイト・定職」については、〈11時間以上〉の割合が56.9%であり、2024年度の54.3%を上回り、2024年度全国平均の49.4%よりも高い。

図5.2 授業期間中の平均的な 1 週間（7 日間）の生活時間【4 年生】



4年生の回答を図5.2に示されている。まず、「設問1: 授業への出席」については、〈5時間以下〉の割合が75.6%であり、昨年度の73.5%および全国平均の65.3%を上回っている。「設問2: 卒業論文・卒業研究・卒業制作」では、〈16時間以上〉の割合が32.2%であり、2024年度の28.4%をわずかに上回り、全国平均の33.0%より低い。「設問3: 予習・復習・課題など授業に関する学習」では、〈5時間以下〉の割合が87.7%となり、2024年度の85.0%をわずかに上回り、全国平均の80.3%よりも高い値を示している。「設問4: 授業と直接関係しない自主的な学習」については、〈5時間以下〉の割合が69.5%であり、2024年度の66.8%を上回るとともに、全国平均の

67.6%をやや上回っている。「設問5: 部活動・サークル活動」では、〈0時間〉の割合が79.6%であり、2024年度の82.7%より微減したものの、全国平均の73.1%より高い値を示している。「設問6: アルバイト・定職」については、〈11時間以上〉の割合が64.5%であり、2024年度の59.4%を上回り、全国平均の50.8%よりも高い結果となっている。

東洋大学、所属学部・学科への満足度

大学独自設問「1. 所属学部・学科に満足していますか」および「2. 東洋大学に満足していますか」について、いずれも「満足している」および「やや満足している」との肯定的回答の割合は、それぞれ90.0%であった。表1に示すように、「東洋大学に満足していますか」と「所属学部・学科に満足していますか」には、正の相関関係が認められるほか、「大学の学びによって成長を実感している」「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」「卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している」「教職員が熱心に教育に取り組んでいる」といった項目とも有意な正の相関が観察された。

表1 東洋大学への満足度との相関係数

所属学部・学科に満足していますか。	.664**
(問4 これまでの大学での学び全体を振り返って、次の項目についてどのように思いますか)	
大学の学びによって成長を実感している。	.507**
教職員が熱心に教育に取り組んでいる。	.472**
授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている。	.439**
卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している。	.307**

**、相関係数は 1% 水準で有意 (両側) です。

まとめ

2025年度の調査結果は、2024年度と比較していくつかの変化を示している。具体的には、大学入学後に受講した授業に関して、「予習・復習など授業時間外に行うべき学習が指示される」「課題等の提出物に適切なコメントが付されて返却される」「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」といった項目において、いずれも増加傾向が見られた。また、「インターンシップ」「海外留学・海外研修」「主に英語で行われる授業の履修」についても、経験した割合が増加し、これらの経験に対する評価もより高まっている傾向が認められる。さらに、大学での学び全体について、「卒業時まで身に付けるべき知識や能力を意識して学修している」「授業アンケート等の学生の意見を通じて大学教育が良くなっている」「教職員が熱心に教育に取り組んでいる」「大学の学びによって成長を実感している」といったすべての項目において、2024年度より高い評価が示された。

しかしながら、いくつかの問題点も認められる。まず、「ティーチングアシスタントなどによる補助的な指導がある」については、2024年度の平均値を上回っているものの、依然として全国平均には及ばなかった。特に、学部間において差異が見られる。次に、生活時間に関しては、2年生および4年生において、「予習・復習・課題など授業に関する学習」や「授業と直接関係しない自主的な学習」に費やす時間の過少 (5時間以下) の割合がやや増加している。また、「部活動・サークル活動」や「アルバイト・定職」に費やす時間の過少 (「0時間」や、「11時間以上」の長時間労働の割合も増加傾向にある。

大学への満足度が高いことには、所属学部・学科への満足、大学での学び全体における成長の実感、学生の意見を通じた大学教育の改善、身に付けるべき知識や能力を意識した学修、教職員が熱心に教育に取り組んでいるとの実感が寄与していると観察された。

今後、文部科学省による2025年度「全国学生調査」の結果公表に伴い、本学全体および学部別との比較分析を実施する。